

E
ランクの薬師
2

登場人物 紹介

スラガ

王宮の医術士局長。
亡くなったキャルの父の
後任にあたる。
謙虚で腰が低い
好人物に見えるが……？

ママリ

スラガの弟子。
頭がよく、薬学の知識も
豊富だけれど、
無口で人見知りな
性格。

グラン

キャルが元いた
パーティのリーダー。
魅了の力を使って
人々を操り、
大騒動を起こしたため
投獄された。

サシャ

王宮に勤める魔法使い。
オーレリアンの部下で、
いつも損な役回りを
押し付けられるがち。

オーレリアン

王宮の筆頭魔法使い。
自信家な性格で、
カイドとは旧知の仲。
キャルの実力を
疑問視している。

カイド

Sランクの魔法剣士。
剣の腕は一流で、
高度な魔法も使いこなす。
キャルの相棒であり、
今は恋人でもある。

キャル

Eランクの薬師。落ちこぼれ
扱いされてきたけれど、
実はすごい知識と能力を
持っている。その才能を
カイドに見出され、
彼とパーティを組むことに。

目次

プロローグ

第一章 キャルのランク上げ

第二章 新薬の脅威きょうい

エピローグ

293

99

12

7

プロローグ

煌びやかな城の廊下を、カイド・リーティアスは颯爽^{さつそう}と歩いていた。

自分に注目する人々の視線を無視して、まっすぐに筆頭魔法使いの執務室へ向かう。

重厚な扉の前に立つ衛兵は、カイドの姿を認めるに、無言で頭を下げた。

そんな衛兵の姿に目も向けず、彼はノックもなしでドアを開け放つ。

「カイド！ やあ、よく戻ったね！ 僕には分かつていたよ。君がいかに優秀で強く素晴らしいかということもね！」

中には一人の美男子が立っていた。彼はカイドが部屋に入った途端、満面の笑みで腕を広げる。

この男には、カイドが城の敷地内に入つただけで、それが伝わっている。魔法使い同士が使う通信があるのだ。ノックなどしようとしたところで、それより先に扉が開かれ「僕には分かつていたよ！」と言われるのがオチだ。

この妙に瘤に障る男が、この国の筆頭魔法使いオーレリアン・シャルパンティである。

彼は、この世界で誰よりも知識が多く、魔法の使い方にも長けている、世界屈指の魔法使いである。艶やかでまっすぐな黒い髪に、同色の輝く瞳。透けるような白い肌。その美しさは、まさに人

間の域を超えた、神々たちの最高傑作だ——と、本人が言っている。

だがカイドは知っていた。実は知ったかぶりをしている時も多々あると。実に面倒くさい男だ。

「今回の報告を……」

カイドが言いかけた言葉を遮つて、オーレリアンは叫ぶ。

「山猿を相手に戦い、さらには大きな詐欺の犯人も捕まえてきたそうではないか！ つまり、今回の調査の目的だった魔物の群れというのは山猿であり、それを倒したと嘘を流した人物を捕まえてきたのだろう？ ……え？ もう知っているのかつて？ ふつ、僕を誰だと思っているんだい？」

もう何も返事をしたくないカイドを放つて、オーレリアンは無駄に胸を張る。さらに、無駄に格好つけて言うのだ。

「僕は全知全能のオーレリアン様！ なんだって知っているんだよ」

こんなやつでも、国王と宰相に次ぐ国の権力者だ。

カイドが報告に来る前に、様々な情報が彼に届いているのは分かつていた。だが書類に判子をもらわなければ、報奨金が手に入らない。ただ働きなんてまっぴらごめんだ。

「ああ、でも安心したまえ。君の言葉を遮るような無粋な真似はしない。君とゆっくり語らう時間は最高だからね」

今遮ったばかりだろに。本気で面倒くさい。仕事をくれる相手でなければ話もしたくない。

呆れたカイドの視線を浴びながらも、オーレリアンは彼に手を差し伸べる。

「僕は全てを知っている！ だが、君が僕に報告したいというのなら聞こうじゃないか。さあ、さ

あ！ 報告したまえ！ 君の武勇伝をこの優秀な頭脳にしかと記憶してあげよう

「黙れ」

カイドはあらかじめまとめてあつた報告書を彼に投げつけた。

毎回こんな感じだ。いい加減、カイドが報告をあげる相手を変えてもらえないだろうか。

Sランクの冒険者は国から依頼を受け、国へ報告をする。その窓口がオーレリアンなのだ。

散らばってしまった書類は、ひらひらと舞い上がり、オーレリアンの手の中に綺麗に収まる。手で拾えばいいところを、魔法で風を操つて自分の手の中に落ちてくるようにしたのだ。

毎回毎回、隙あらば力を見せつけようとする。こういうところも、とことん気が合わないと思う。

「書面では味気ないと思つて、君の口から聞きたかったところだが、君は恥ずかしがり屋だからな。仕方がない。この書類を読むとしよう」

すでに帰りたいが、金は欲しいのでもう少し我慢することにした。

数秒後、オーレリアンがため息を吐く。

「知つてはいたけれど……このEランクの薬師、本当に仲間にしたの？」

さつきまでの満面の笑みを消して、彼は苦々しい口調で言う。

「ああ。Eランクだが、力量はAランクに迫ると思つている」

「A？ カイド、本気か？」

オーレリアンが報告書を手にしたまま、天を仰ぐ。

「キヤルを見たら分かる。報告書にも書いているだろう。薬の出来と、山猿のボスを見分けるほど

の能力を」

「……ああ、書いてあるね」

オーレリアンは無表情で報告書を見つめた後、はつと馬鹿にしたように笑う。

「カイド、Eランクの冒険者というものの力量が、君には分からぬのだろうね」

「嘆かわしいというように首を横に振るオーレリアンを、カイドは冷たい目で見返す。

「なんのことだ」

「Eランクというのは、そこら辺の一般人と変わらないのだよ！ 薬師と名乗っていたって、ただの薬屋のおばあちゃんと一緒だ！ 何せ、書類を一枚書けば冒険者と名乗れるのだからね！」

鼻息荒く詰め寄るオーレリアンを避けて、カイドは報告書を指さす。

「ちゃんと読んだのか？ 彼女は詐欺にあつていて、結果を出しても正当な報酬を得ていない。E

ランクというのは彼女の実力ではない」

「たとえ詐欺にあつていてもだ。Aランクの実力のある冒険者がEにとどまつてゐるわけがないだろう。Aランクに到達するのは、並大抵のことではない。ふつ！ カイドほどの実力者からしてみれば、よく分からぬといふのも無理はないよ！」

だから教えてあげてるんだ！ と声高に叫び自分に酔う男は、本当にうつとうしい。

カイドはため息を吐いて、再び報告書を示す。

「もういいから、さつさと判子を押せ」

依頼は完遂しているのだ。とつとつと報酬をいただいてしまえばいい。

カイドは、こんな男にキヤルの素晴らしさや可愛らしさを語つてやる気などさらさらなかつた。

オーレリアンは「口をとがらせて「え」」なんて言つてゐる。だがカイドが表情を変えないのを見ると、しぶしぶ判子を手に取り呪文を唱えた。

オーレリアンが押した印は虹色に輝き、複製不可の成功証明書となる。

これを持つて城の財務関係の部署に行けば、しつかりと報酬がもらえるのだ。

書類を受け取り、踵を返すカイドの背中に声がかかる。

「次の依頼だ。次というか、追加のようなものだな」

振り返った瞬間に断ろうとしたカイドに、オーレリアンは言う。

「詐欺師集団の裁判に必要な証言をしてもらいたい。しばらく王都に滞在してくれ」

真面目な顔で言われ、カイドはため息を吐いた。

それはカイド以外にできないことなので、不承不承頷く。

「分かった」

本当なら、すぐにキヤルの故郷であるコロンに帰りたいところだが、仕方がないだろう。

部屋を出ていくカイドを見送つて、オーレリアンが舌打ちをした。

「カイドともあろう者が、女に骨抜きにされたつてことか。……Eランクが、Aランク並み？ はんつ。ランク付けというものを甘く見ないで欲しいね」

彼は執務室で一人、手元に残つた報告書を指先で弾く。

「——いけないね、カイド。そんな間違ひは認められないよ」

キャル・アメンダは冒険者として、カイドとパーティを組んで活動している。冒険者とは、魔物を倒したり、薬草を採集したりと、一般人がなかなかできないことを請け負う人間だ。

キャルは、その冒険者の中でも最弱とされるEランクの薬師。そして、共に行動するカイドは最高ランクにあたる、Sランクの魔法剣士だ。

元々、キャルは普通の女の子だった。

コロンという辺境の町で薬屋をやっていたキャルは、勇者と名乗るグランたちのパーティに騙された形で冒険者として旅を始めた。しかし、いくら頑張ってもキャルのランクは全く上がらず、グランに邪魔者扱いされるようにして捨てられた。

キャルは故郷に帰ろうとお金を貯めて、護衛を雇つた。それがカイドである。

当初、キャルはカイドが非常に強そうだと思いはしても、ランクまでは知らなかつた。カイドに聞いてもはぐらかされて……そのランクを知つたのは、キャルの故郷であるコロンに着いてからだつた。

Sランクなど雇えるお金がキャルにあるはずもない。しかし、カイドの腕に寄生していた虫を取り除いたことから感謝され、彼はキャルの護衛を買って出てくれたのだ。

Sランクは国に数人しかおらず、国からの依頼を受けることができる高給取りだ。

後になつてカイドからランクを知られたキャルは、頬を膨らませて文句を言つた。

「やっぱり、あんな額じゃ全然ダメじゃない」

寄生虫を取り除いたのだけ、キャルはその虫自体がお金になるから欲しかつただけで、純粹に彼を助けようとしたわけではない。

なのに、カイドは彼にしてみたらタダ同然の金額でキャルの依頼を受け、助けてくれた。申し訳なさや、自己嫌悪など、感謝以外の感情が湧き上がつてくる。

キャルが俯くと、カイドは彼女の膨らんだままの頬を嬉しそうに突いた。

眞面目に落ち込んでいるのに！

キャルは彼を睨みつけた。だがカイドは、首を傾げて笑うのだ。何をそんなに気にするのかと。「いいんだよ。俺が受けたくて受けたんだから」

むくれるキャルを見ながら、いつまでも嬉しそうにしているカイドは変だ。

「命を助けてやつたんだと胸を張らないキャルの方が変なんだぞ？」

カイドは、キャルの頬を両手で包み込んで言う。

「そして、俺が純粹な善意で助けたっていうのも間違つてているな。俺は、キャルを口説くために同行したんだから」

そんなことを言う彼は、最初の怖かった印象とは百八十度変わつて、甘い視線をキヤルに向ける。キヤルはカイドの恋人でありながら、冒險のパートナーにもなつたのだ。

グランと旅をしていた時は、どんなにひどい扱いを受けてもグランから離れられなかつた。その時は、それが幸せだと思つていたから。

しかし、カイドと旅をするようになつて、あれがどれだけおかしな状況だったのかがよく分かつた。キヤルは、グランから魅了の魔法をかけられており、だから彼に逆らえなかつたのだ。魅了の魔法は、カイドに解除してもらつた。

一方のグランは、その魅了の魔法によつて、様々な罪を犯していたらしく、カイドとキヤルで彼らを王都へ移送したのだった。

王都に着くと、カイドの家だという場所に案内された。

キヤルの感覚からすれば、王都に一軒家を持つてゐるなんて、かなりの大金持ちだ。
「この家、あまり使わないんだ」

もつたひないことを平氣で言う彼は、國中を旅して回つてゐる。だつたら、わざわざお金のかかる家をなぜ買つたのだろう……と思つたら、自分で買つたものではないなどとぬかす。Sランクともなると、王都に定住してもらうために、國が家を提供してくれるらしい。

「ここだ。何してもいいから自由に過ごしてくれ」

何してもつて……だが確かに、なんでもできそうだ。無駄に大きい建物。美しく整えられた花壇

と大きな玄関。外壁のあちこちに彫られた飾り。まるで貴族が住んでゐる豪邸のようだつた。中に入ると、がらんと広く、調度品と呼べるような洒落しゃれたものは全くない。

けれど、どこまでも掃除が行き届いている。

「すごい。留守の間は掃除してくれる人みどりを雇やどうの？」

キヤルはピカピカの床に見惚みどりれながら聞く。

カイドはキヤルと一緒に旅をしていたので、最低でも一年は帰つていはないはずだ。

「いや。保存魔法をかけてゐるんだ。この家に使用人はいない」

カイドがパチンと指を鳴らすと、空気が動いたような気配があつた。精靈が風や水の力で掃除をしてくれていたのだろう。

「便利」

それほど魔力のないキヤルには叶わぬ願いだが、この保存の魔法と掃除の魔法は是非ぜい覚えたい。そして家に荷物を置いた途端、カイドは言う。

「城に報告してくるから、休んでいろ」

グランたちは馬車が王都に着いた途端、現れた兵士たちに連れていかれてしまつた。城の敷地内にある牢屋で身柄を拘束されるようだ。

カイドはその件で、すぐに報告しに行かなければならぬのだろう。

「うん。お茶、勝手に淹いれて良い？」

「ああ。食糧は何もないが。家中、勝手に見ててくれて構わない」

食糧が空っぽなら、買い物にも行きたいなあとぼんやり思いながら、キヤルはカイドを見送った。

カイドの自室らしき部屋とは別に、客間として使う気なのか、新品の家具が置かれた部屋がいくつかある。

キヤルは、勝手にカイドの隣の部屋を借りることに決めた。自分の荷物を運び込み、布団などをチェックするが、見事としか言いようがないほどぴかぴかだ。

ぐるりと家を探検しても、掃除などのやるべきことはなかつた。

だつたら、買い物に行つて食べ物を調達しようと、キヤルは街中まちなかに出ていく。

さすがは王都。全てのものが集まる街だ。

美味しそうな食材はもちろん、何に使うか分からないものも多く見られる。

床に塗るとべたべたになる薬や、天井からぶら下げるテープ。

両方とも害虫を捕まえるものらしいが、キヤルは使われているのを見たことがない。

「お、嬢ちゃん、見ない顔だね。一人かい？ 女性の一人歩きは危ないぜ」

一人の店主が声をかけてきた。

店先には乾燥した長いツタがぶら下がり、壁一面に様々な色をした瓶が並んでいる。

台の上にはヤモリやカエルの干物が所狭しと並び、火薬のような丸薬もあつた。

「王都って危ないの？」

「あん？ どこの田舎いなかから出てきたんだい？ そりやあ、こんだけ人がいると悪いやつもいるから

さあ。女の子の一人歩きは危険がいっぱいさあ！」

店主はキヤルを手招きして、何かの瓶を見せてきた。

「いいか？ これは、悪いやつを追つ払う薬だ」

彼が見せてきたのは、瓶に入つた白い粉。よく見ればキラキラ光つているような気もある。

「追い払う？」

キヤルが素直に近寄ってきたことで、店主のテンションが上がつたようだ。

「そう。近寄ってきた相手に、この粉を振りかけるんだ。するとどうだい。相手は目と鼻を押されてのたうち回るのよ」

そんな薬があるのか。キヤルは驚いて、その薬を手に取る。

「舐めてみてもいい？」

キヤルが聞けば、店主は目を剥むく。

「馬鹿かねつ！ いいわけがないだろうが。痴漢撃退用の薬だぞ？ 舐めたら喉のどが朝までイガイガなるほど。イガイガする成分が入つているのか。しかし、キヤルが今まで見てきた薬は、病氣や

怪我を治すものでしかなかつた。

痴漢撃退。どんな成分が使われているのだろう。

結局キヤルは一瓶だけ買つてしまつた。意外と高かつたけれど、興味の方が勝つた。

そんなふうに街の中は面白くて、今度またゆっくり見に来ようと思いつながら、キヤルは夕食の材

料を買つて家に帰ることにした。

夕方、城に報告に行つていたカイドが帰つてきた。

「おかえりなさい」

という自分の声に、ふと夫婦のようだと思つて、キヤルは心の中で大いに照れた。

「ただいま。——いい匂いがする。夕食？」

家に入つてきた途端、カイドは鼻をくんくんと動かして驚いた顔をする。

そんなカイドを笑いながら、キヤルは頷いた。

「そう。街に食材買いに行つたの。いろいろあって、楽しかった！」

キヤルがキッチンを示すと、カイドは素直についてくる。

そんなに凝つたものはできないが、旅の間は食べられなかつたような料理ばかりだ。

「この家のキッチン、多分、初めて使われたぞ」

やつぱり。保存魔法のおかげだとしても綺麗すぎると思った。

「ああ、お腹すいた。歸つてきて料理が並んでるなんて、すごく嬉しい」

カイドは大げさに喜びながらテーブルに着く。二人で夕食を食べ、順番にお風呂にも入る。

「あ、カイド。カイドの部屋の隣、借りるよ」

キヤルがそう言うと、思つてもみない反応をされた。

「隣？ あそこはダメだ。保存魔法がかかつていただろう？」

ダメだと言われるとは思わなくて、キヤルは慌てる。

「そうなの？ ごめん。荷物入れちゃつた。じゃあ、その隣は？」

「それもダメだ。保存魔法がかかつてゐるところは使わないでくれ」

カイドに聞いてからにすればよかつたと、内心で慌てながらキヤルは謝罪する。

「勝手に使ってごめん。じゃあ、どこを使えばいいのかな？」

「保存魔法がかかるつていない部屋だ」

カイドは家に入つてきた時に保存魔法を解いたように見えたが、一部の部屋だけだつたらしい。

「かかるつてないところつて、どこ？」

キヤルはリビングで寝ることになるのだろうか。別に野宿よりはいいから構はないが、来客など

があつたら恥ずかしい。

「俺の部屋だ」

「却下。^{きゃつか}——じゃ、やつぱり隣の部屋を使わせてもらうね」

すぐさま切り捨てて、キヤルは勝手に荷物を置いた部屋に向かう。

「俺は同じ部屋がいい！」

恥ずかしいことを叫んでいるカイドを置き去りにして、一人部屋へと戻り、旅の疲れを癒すため布団に入つたのだつた。

次の日も、カイドは城に向かつた。

グラントたちの件は大きな裁判になるらしい。キヤルを騙していたことも罪だが、それより街一つを丸ごと魅了の魔法にかけていたことが問題視されているという。

頭が良く、狡猾なグラント。彼は強力な魅了の魔法を握り、最小限の魔力で多くの人間を騙した。その街以外にも被害はなかったのか、余罪を捜査中だという。

それに協力しなければならなくなつたカイドは、しばらく王都にいることになつた。

裁判で証人として証言することはもちろん、事務的な手続きが多くあるらしい。

逮捕権まで持つ、Sランク様ならではの苦労ということだろうか。

カイドが城に行つてゐる間、キヤルは街で買い物をしたり、調剤や家事をしながら待つてゐる。毎日城に出仕していくカイドを見送つて、夕食を作つて出迎えるのだ。

キヤルは好きに調剤できるし、お金に困つてもいい。

カイドは「長引いてごめん」と申し訳なさそうにするけれど、そんなに気にしなくていいのに。コロンに帰りたいけれど、いつかは帰れるのなら、今は王都を満喫したい。

王都は珍しい素材がたくさんあるし、それを使って、面白いものも開発している。

害虫対策として家の隅などに置く毒から、強盗に投げつける落ちにくい薬品なんていうのまであつた。薬草をこういうふうに使うこともできるのかと、とても勉強になる。

夕方にはカイドが帰つてきて、その日あつたことを話しながら夕食をとる。

そして、寝ようと思つて寝室に行く時には……

「同じ部屋がいい。キヤルを抱きしめて眠りたい」

……毎晩、カイドが悲しそうに呟いてゐる。「それができないなら、野宿の方がましだ！」と、この立派な家の中で叫ぶカイドは少しおかしいと思う。

ともあれキヤルは、王都での平和な日常も、それなりに楽しんでいた。

——ただ一つ。いつまでも慣れることができないことを除いて。

調剤に夢中になりすぎて、気が付いたらカイドが帰つてくる時間になつてしまつていた。

王都に滞在してそろそろ二週間。珍しい材料で作る新薬が完成しそうで没頭しすぎた。

カイドは笑つて「構わない」と言い、二人で夕食に出ることにした。仕事をして帰つてきたカイドにこれ以上、食事を待たせてしまうわけにはいかない。

……本当はあまり気が進まなかつた。キヤルはカイドと王都を歩くのが、初めて二人で買い物に出了た時から憂鬱なのだ。

街を歩いて数分で、カイドの名前を呼ぶ女性の声が聞こえた。

「リーティアス様」

——ああ、まだだ。キヤルは唇を噛みしめて、ため息をこらえた。

カイドと一人で出かけると、必ず女性が声をかけてくる。

「このようなところでお会いできるなんて。ずっとお会いしたいと思つておりましたの。私は魔法使いなんです。私の治療魔法をどうかお役に立ててください」

両手を胸の前で握りしめて、うつとりとカイドを見上げる女性。

振り返れば、他にも数人の女性が立っていた。いずれも、綺麗で優秀な人ばかり。

分かりたくないのに、習慣になつて『探索』というスキルで、彼女たちの実力が大体把握できてしまう。

全員が、キヤルよりも強い。キヤルなど、一瞬で吹き飛ばせるほどの魔力を有していた。

今まで単独で行動していたカイドが他者と行動を共にするようになつたことは、冒險者の中で瞬く間に、噂になつたらしい。

ご丁寧にも、以前こうやつて声をかけてきた女性が、キヤルに説明してくれた。

「こんな最低ランクの薬師よりも役に立つて、さらに、慰めても差し上げられますわ！」

——と。

ようやく組んだ相手が、Eランクの薬師であることが、大きな話題として人々の口に上った。

Eランクの薬師ごときが、Sランクのサポート。

そんな噂を耳にした冒險者が、だつたら自分が役に立つと、名乗りを上げ始めたのだ。

「キヤルは恋人だ」

カイドがそう公言して憚らぬことも、女性が多く寄つてくる原因になつていて。

普通だつたら、女性の数は減るはずだが、『あんな女よりは勝つている』と自負する魅力的な女性たちが、我先にとカイドへ声をかけてくるのだ。

キヤル程度は眼中にないと、態度で表す女性ばかり。もちろん、そんな態度を取られればムツとするし、女性ばかりが寄つてくることにイライラもする。だけど……

キヤルは、今近寄つてきた女性を眺めた。外見が魅力的なことはもちろん、多分Aランク。強い魔力を持つている。この魔力で治療魔法を使えば、かなりの効果が見込めるだろう。

グラムにパーティを追い出された時の記憶が蘇る。あの時よりもずっと辛くて、想像するだけで泣いてしまいそうだ。

カイドはキヤルのそんな不安を感じ取つていてのか、彼女たちに視線さえ向けることもない。

「知らない」

邪魔だとはつきり態度で表しながら、キヤルの肩を引き寄せた。

どんなに人が集まつても、彼が必要としているのは自分だと、優越感にも似た喜びが胸の中に湧き上がる。

少しにやけてしまつていると、キヤルの方が彼女たちと目が合つてしまつことがある。全ての女性が『なんでこんな子が』という蔑みだ目をしていた。

だがカイドははつきりと、キヤル以外は必要ないと態度で示してくれる。

キヤルも、それに応えたいと思う。

どんなに魔力がある人でも、キヤルの持つ大量の薬にはかなわないだろう。病気や怪我はもちろん、毒にも対応できる自信がある。

だから、キヤルはカイドの横に立つていてもいいのだと、自分を鼓舞していた。

そうでもしないと、蔑んで視線を浴びせられて、滅入つてしまいそうだつた。

「薬師なんて、ただ薬を作つてゐるだけでしょ。楽なものね」

「彼をどんな理由で縛りつけているの？ 可哀想だわ」

「ああ、薬草くさいわ。しかも所帯じみでいるし」

毎日毎日、こうして女性が寄ってきては、こぞつてキヤルを邪魔者扱いする。

自分は役に立っている。彼女たちにできないことができる。

そう思えば、最初は平気だった。そもそも、カイドになびく様子が全くないので、彼が別の人を選んでしまうことは心配しなくてもいい。

だが中には、大胆な発言をしてくる女性もいた。

「私は、戦いでも役に立つわ。もちろん、望まれれば、心も体も癒して差し上げる」

その時、ふと気が付いたのだ。

「彼女たちも、キヤルにできないことができる。

最初は強がって胸を張っていたが、多くの人に否定され、睨まれ続けて、心が折れそつた。

カイドが選んでくれたから！

そう大声で言いたくても、自信を失いかけたキヤルにはできなかつた。

「キヤル、行くぞ」

キヤルの返事を待たずに、カイドはキヤルの肩を引き寄せたまま歩き出してしまう。

カイドに引きずられるようにして歩くキヤルの耳に届いたのは、憎々しげな女性の言葉。

「足手まといのクズが」

そんな小さな呟きを拾つてしまふ自分の耳が悲しい。

そして、それを否定できない自分の心も悲しい。

カイドを見上げて謝りとなる。だけど、謝つてどうなるのだろう。謝つたつて、カイドはその言葉を否定して、慰めてくれるのだ。

カイドが彼女たちの味方をするはずないと信じているけれど、辛い。

絶対ないと思っていたのに、他の人に乗り換えられることを想像してしまう。

一度、グランたちにもされたことだ。

カイドとグランは全く違うのに、そんな最低な想像をしてしまつて、キヤルの目から涙がこぼれそうになる。

周りの人からすれば、SランクであるカイドのそばにEランクの薬師がいること自体が、あり得ない話なのだ。彼らにとつて、キヤルは目障りなのだろう。

誰も彼もが、自分を邪魔者扱いしている気がした。周りの目が気になり始め、そんな自分が嫌になる。

本当だつたらカイドとこうして街を歩くことは、とても嬉しいはずだ。

最初は楽しかつた。だが、今は周りが気になつて、自分がここにいるのは間違つていると言われているような気がして、いたたまれない。

カイドに促されままに歩き続けて、ふと気が付くと、誰もいない場所にいた。

肩を離されて顔を上げると、カイドが苦しそうな顔をしていた。

「あんな女の戯言を聞く必要はない。キヤルが何もできないなんて、そんなわけがないと言つてい

るだろう？」

薄闇に包まれた空き地で、キヤルはカイドの腕に包まれた。

「周りなんて気にするな。誰も、キヤルの実力を知らないんだ」

カイドは優しい。キヤルが何に対しても傷ついているのかを、すぐに分かつてくれる。キヤルのランクなんか気にしない。一緒にいることに、資格なんて必要ないと笑い飛ばしてくれる。

しかし、キヤルは気になつて仕方がないのだ。

ランク……その大きな壁が、彼とキヤルの間を隔てているという思いが、どんどん大きくなつてきていた。

次の日、城から早めに戻ってきたカイドが言った。

「悪い、キヤル。ギルドへの報告を忘れていた。いつも城への報告だけで済ませていたから」

キヤルが目をぱちくりさせていたら、彼はしつかりと詳しく述べてくれた。

カイドとキヤルは今回、国からの依頼でノース山を調査した。『魔物の群れがいる』という噂うわさが流れたからだ。

その噂の真相を突き止めるため、ノース山に入り、山猿に襲われたことは、もう思い出したくもない。その後も魔物の群れなど見つけられず、近くの街に話を聞きに行つたところで、グランと再会したのだ。

結局、噂うわさはグランたちが流した嘘うそだつた。国をいたずらに混乱させたとして、グランたちは逮捕

され、それはカイドとキヤルの功績になるという。

「俺は今までギルドに報告する必要がなかつたから、行かなかつたんだ。けどキヤル、お前は行けばランクが上がる」

「ランクが、上がる……」

キヤルは、カイドに言われた言葉に呆然とした。

カイドはすでに最高ランクのSだ。報告しようがどうしようが、ランクに変わりはない。

それに報酬もすでにもらつていて。金額を聞いて、キヤルが立ちくらみを起こしたのはご愛嬌あいきょうだ。その報酬のおかげで、王都で売られている高価な薬草にも手が出せるのだ。

「今からでも報告に行こうか」

キヤルは声も出せずに頷いた。

ランクを上げることなんて、もうほとんど諦めていた。グランたちに騙だまされていたとはいえ、冒険者として活動を始めて数年経つていて、ずっと変わらずEランクだつたのだ。

もしも……ランクが上がつたなら。

キヤルは期待する気持ちを抑えることができなかつた。

報酬は高額あやうだった。ならば、それに相応するランクは……

キヤルの表情を見たカイドは、微笑んで彼女の手を握つた。

ける冒険者の地位を表しているかのようだ。

冒険者として活動する人間は、危険な行動を要求される代わりに、人々の尊敬を集め。魔物が出た時に助けてくれるのは冒険者だし、貴重な薬草などを集めてくるのも冒険者だ。ランクが高くなればなるほど地位が上がっていくし、それがSランクともなれば、国王から直々に声をかけられ、貴族と同じような扱いを受ける。

——いや、財産に関しては貴族以上かもしない。

王都のギルドは、そんな冒険者たちを統括する場所なのだ。

キヤルは、王都のギルドには初めて入つた。元々依頼を受けるのも報告するのも冒険者だ。い、キヤルは外で待っていたので、ギルドに入つたこと自体が少ないのだが。

大きなガラス張りの扉が、キヤルが近づいただけで左右に割れる。

驚いて思わず足を止めると、カイドが笑って手を差し出してくれた。

「魔力石を無駄遣いした扉だよ。大丈夫だ。キヤルを挟むことはないから」

近くを歩く人たちにも微笑ましげに見られて、キヤルは少し顔を熱くした。

入つた先は、ピカピカの床が続く贅沢な空間だった。半円形のカウンターに女性が二人座つている。カイドは勝手知ったるよう、彼女たちに近づいて、「完了報告だ」と言った。

受付の女性たちは、カイドを一目見るなり立ち上がり、大きく頭を下げた。

「リーティアス様！ ああ、わざわざお越しただくなんて。こちらからお伺いしましたのに！」

一人が両手の指を組んでカイドを見上げれば、もう一人は体をくねらせてカイドに近づいてきた。

「ご案内しますわ！ すぐに所長室へお通しします」

その大きな声に、カイドはしかめつ面を作り、舌打ちをする。

「いらない。報告に来ただけだ。何度も言わせるな」

途端に、彼女たちは満面の笑みを消し、慌てて頭を下げた。

「も、申し訳ありません……この札をお持ちになり、五番窓口へお願ひします」

二人は上目づかいでカイドを見ながら、番号札を差し出した。カイドが札をもらつて足を向ける

先へ、キヤルもついていく。

そこでようやくキヤルの存在に気が付いた彼女たちは、驚愕の表情を浮かべる。

そして、なぜこんなところにネズミが迷い込んだのか……というような目でキヤルを見てきた。今すぐに掃き出したいと思っているような目だ。

王都に着いて以来、カイドと一緒にいると、常にそんな視線にさらされてきた。もうそんな目を見たくなくて俯いたまま、キヤルはカイドの後に続いた。

いくつも並んだ窓口は、依頼を引き受けるためのもの、依頼を出すためのもの、報告をするためのものなど、用件ごとに分かれていた。

カイドは言われた通り五番窓口に向かい、一枚の書面を差し出した。

国からもらつてきたという成功証明書だ。

グラントちが持つていたものとは違い、淡く光っている。

「光つてる？」

思わず声に出すと、カイドがキヤルを見下ろして頷く。

「ああ。王室魔法使いが偽造防止のために魔法をかけてるんだ」

国からの成功証明書は、報酬もランク上げのための経験値も段違いだ。だからこそ、偽造された時の被害が大きいため、そのような措置をとっているのだという。

そんな成功証明書に、自分の名前がある……！」

キヤルは、どきどきと心臓が痛いほど脈打ち始めたことを自覚した。

「リーティアス様。成功報告ですね。受理いたします」

窓口の男性がにこやかにその証明書を受け取った。

「少々お待ちください」と言われ、窓口の前にいくつか並んだソファの一つに座る。

キヤルは両手を膝に乗せて、体中に力を入れて座っていた。

「すごい緊張してるな」

隣に座ったカイドは、こぶしを口にあてて、くつくつと堪えるような笑い声をあげている。

緊張するのは当たり前だ。初めて、ランクが上がるかもしれない。

キヤルは、書類を読んでいると思しき係の男性を見つめ続けた。

十分と少し経つただろうか。時計を見ればそれくらいだったが、もっと長いこと待った気がする。

「リーティアス様」

名前を呼ばれて、カイドが立ち上がる。

キヤルも飛び跳ねるように立ち上がつてカイドに続く。

「成功報告を受け付けました。すでに報酬は受け取られているご様子。お二人のランク等に変化はありません。お疲れ様でした」

淡々と告げられた言葉の意味を、キヤルは理解できなかつた。

「なんだつて？」

キヤルが声を発する前に、カイドが係の男性に詰め寄る。

「なぜ、彼女のランクが上がらない？ 国からの依頼だぞ？」

じわじわと、覚えのある絶望が忍び寄つてくる。

そう、ランクは上がらない。キヤルは、どんなに頑張つても、やっぱり――

「報告書を確認させていただいての結果でございます。そもそも、報告書を見ても彼女の功績とは思えないのですよ。山猿のボスを見つけたとあります……本当に？」その後リーティアス様が、広範囲を爆破されていますね？ 見つけたのが本当であつたとしても、結局はあなたが倒したのでしょうか？」

男性の声が、やけに遠くから聞こえる。もう、聞き飽きた言葉がその裏に隠れていた。

『なんの役にも立たない』

頑張って、頑張つて、一生懸命役に立つていてと思つていた。

「勝手な解釈を許した覚えはない。提出した報告書通りに判断しろ」

カイドの言葉に、男性は困つた顔をして首を横に振る。

「私だけの判断ではありません。上方からも、こういう報告があるかもしれないのに気を付ける

「よう指示があつたのです」

「——上？ ギルドの？」

カイドのこぶしに、ぐつと力が入つたことに気付いた。

キャラルは、上手く頭が働かず呆然としていた。

だがどこか冷静な部分で、自分がランクを上げられるはずがなかつたのだと考えている。係の人は、さらに続けた。

「SランクとEランクが組むこと自体に無理があるんですよ。Sランクの仕事をEランクの者が共に行つたとすれば、次から次にランクが上がつていきます。それこそ、Sランクのあなたはもうランクを上げる必要がないので、全ての功績を彼女に受け渡すことができる」

彼は報告書を示しながら、カイドを見上げる。そして、ちらりとキャラルに視線を投げかけた。

キャラルは、びくりと体を震わせる。

「それはただ、Sランクと一緒にいるだけでランクが上がつてゐるようと思えませんか？ ……何もしていられないのに」

何もしていらないなんてことはない。だけど、山猿との戦いで、キャラルは逃げていただけだ。カイドに抱きかかえられて、逃げて逃げて逃げて……

キャラルに、どんな功績があつたというのだろう。

「何が言いたい？」

カイドが低い声を出して、男性に詰め寄る。

しかし、彼はカイドの言葉に返事をせず、挑むように視線を返した。

「少々調べさせていただきました。リーティアス様とアメンダさんは、恋仲とのこと」

「ああ。もちろんだ」

キャラルが赤面するよりも先に、カイドは平然と答えてしまう。

「ちよつとは照れようよ！」

間髪を容れずに返したカイドに、思わずキャラルが突つ込みを入れた。

カイドの堂々とした受け答えに目を瞬かせた男性は、すぐに気を取り直したように続ける。

「あく……とにかく、それもあつて、リーティアス様がアメンダさんに便宜^{べんぎ}を図つたということが考えられるのです」

彼の言い分に、キャラルはなるほどと思つてしまつた。

それができるならば、Sランクの人は仲間のランクを上げ放題だ。

Sランクの人にはなんのメリットもない。しかし、相手が大切な人だつたら……？ たとえば恋

人に、ランクをプレゼントするなんてことも……？

「つまり……俺が、全く役に立つていないキャラルを、役に立つたように書いて報告していると？」

カイドの強い視線を正面から受け止めて、男性は頷く。

「その可能性が捨てきれないのです」

このパーティは、キャラルにとつていいことだらけだ。むしろキャラルにしか、メリットがない。

——ダメだ。彼に反論する言葉が見当たらぬ。

カイドのこぶしに、ぐつと力が入つたことに気付いた。

「お前が心配する必要はない。規定に基づき判断しろ」

キャラルは絶望しつつも納得しているというのに、カイドは男性にさらに詰め寄っていく。

だけど、そんな威嚇には屈しないとばかりに彼は顔を上げていた。

「もちろんです。しかしSランクとEランクが組んだ時の対処法など、どこにも書いてはいないのです。ならば、私が経験に基づき判断しなければいけません」

「……てめえ」

カイドの怒りに震える低い声が響く。揉めていることが伝わったのだろう。周りの人たちがどうしたんだとこちらに顔を向ける。

キャラルは、カイドの腕をぐつと掴んで首を横に振った。

ここで押し問答しても、キャラルのランクは上がらない。——これ以上、恥をさらしたくない。

キャラルの表情を見たカイドが、ぐつと言葉を呑み込むのが分かつた。

「——分かつた」

それは、係の男性に向けた言葉か、キャラルに向けた言葉か。

カイドは踵を返し、建物から外に出た。

キャラルは、カイドの一歩後ろを歩いていた。

——やつぱり私のランクは上がらない。

グラ
ンに騙された
るだま
されてい
たのもあ
るが、カ
イドと組
んでもそ
うなのだ。
これから、キャラ
ルのラン
クが上
がることは一
生ないの
かもしれ
ない。ギ
ルドに拒
否され
て、どう
やつてラン
クを上
げること
ができる
のか。
ずっと、
ずっとEラン
ク。

「……ごめん」

いろいろなことに、キャラルは謝った。

カイドがキャラルを少し振り返る。その表情は、悔しそうで、悲しそうだつた。

「私のために怒つてくれたのに、止めちゃって、ごめん。力に——なれそ
うになくて、ごめん」
「力になれないなんてことはないと、何度も言つて
いるだろう。まだ言つて
いるのか」

カイドが足を止めて、キャラルをきちんと振り返つた。

「俺も、目立つことをしまつたからな。悪い。恥をかかせるつもりじゃなかつたんだ」
じわりと涙が出てきて、キャラルは慌てて顔を俯けた。

声が出せなくて、ふるふると小さく首を横に振る。

「俺としては、ランクはどうでもいいんだ。ただ、キャラルがだんだんと落ち込んでいつてるみたいだから連れていつただけだ。……逆効果だつたんだから、最悪だけどな」

カイドはキャラルを抱き上げ、背中をあやすように撫でる。

キャラルはカイドの首に抱きついて、涙をこぼした。

周りの人たちの視線と言葉に、キャラルが傷ついていたことを、カイドも気にしていた。それなり

に、彼に気遣わせないよう振る舞うことさえできなかつた自分が情けない。

さつきのギルド職員の言い方からすると、カイドと行動する限り、キヤルにランクアップの道はない。ランクを上げたいなら、キヤルはもう一度一人で旅に出る必要があるのかもしれない。

「キヤル、このままいいから、コロンに帰ろう」

だけど、カイドがそうやつてキヤルを甘やかす。このまで充分だと。コロンに行けば、キヤルを蔑む人はいなくなる。

「コロンで薬屋をするんだろう？ 別にランクなんて必要ないじゃないか」「……ん」

冒險者になる前は、コロンで薬屋をしていた。

近くの森に入つて、薬草を採集する。カイドがいれば、もつと珍しい薬草がある場所まで行けるし、魔物の素材も手に入るかもしない。

薬草の研究だつて今よりもっとできるし、新しい薬も開発していくだろう。

亡くなつた父のように、薬の第一人者だと言われるようになるかもしない。

「ありがとう」

キヤルはカイドの言葉に甘えてしまう。

コロンで、キヤルが薬屋になる。その傍らにカイドがいてくれるということは、彼が冒險者ではなくなるということなのに。

このまま、ここに——彼の腕の中にいたい。

だから、キヤルは何にも気が付かないふりをして逃げることにした。

「もうすぐ、ここでの仕事が終わる。そうしたら、コロンに帰ろう」

カイドの甘くて優しい言葉に、全てのものから目をそらして——キヤルは頷いた。

2

次の日、珍しいことに来客があつた。王都に滞在して初めてのことだ。

玄関のドアがノックされた途端、カイドは顔をしかめる。嫌そうにゆつくりと立ち上がり、玄関へと向かう。まるで、相手がその間に帰つてくれればいいと思っているかのよな遅さだ。

カイドがドアを開けると、そこにはキヤルが見たことのない綺麗な男性が立つていた。

グラムも綺麗な顔立ちをしていたが、今日の前に立つている人は、次元が違う。

透けるような白い肌、長い睫に縁取られた切れ長の瞳。まつすぐで艶やかな黒髪は光を放つているかのようで、どこをとっても美しい。見惚れてしまいそうだ。

仮面のカイドとは正反対に、にこやかに微笑むと、彼は挨拶をする。

「やあ。ちょっとお話をしたくてさ」

カイドはさらに嫌そうに口をひん曲げたが、くいつと顎で室内を示した。

どんなに嫌だと思っていても、中へ招かなければいけないほどの相手なのだろう。

おもてなしが必要かと、キヤルはお茶とお菓子を準備するため台所に行こうとした。すると客の男性がじろじろと眺め回してきた。

「……ふうん」

そう言つて、ふいつと興味を失つたようにカイドへ笑顔を向ける。

「ああ、さすがカイドだ。長いこと留守にしていても、家の様子は全く変わらないね」

——とつても感じの悪い人だ。

だけば、カイドが居間に案内していたので、キヤルは黙つてお茶を準備する。お盆を持って居間に入つていくと、カイドと客がソファーカラ立ち上がつた。

「失礼します」

いろいろと思うところはあるが、お茶とお菓子をテーブルの上に並べようとする。並べ終えたら、さつさと退散しようと思っていたのに、またも客に顔を覗き込まれた。

「これが？」

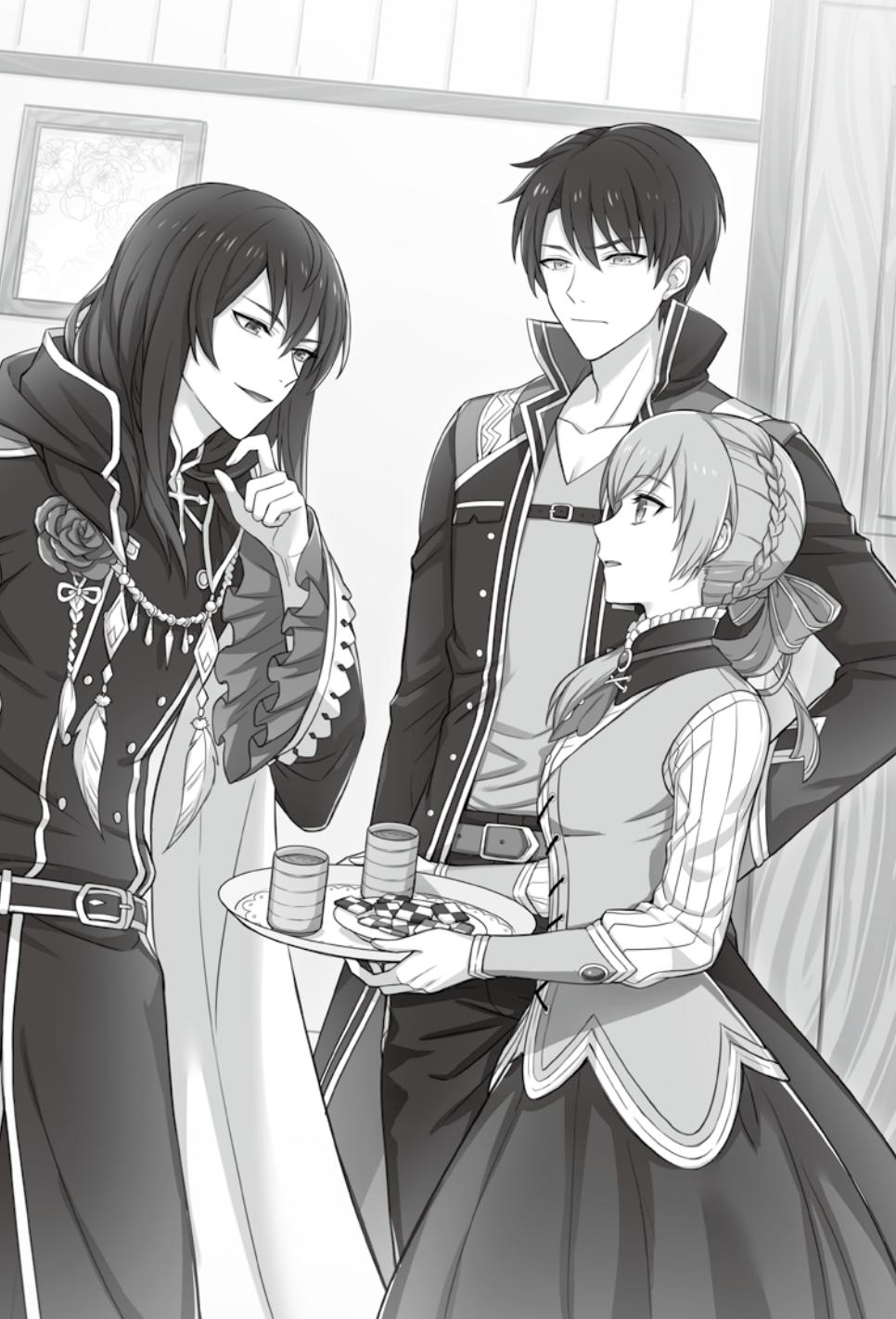
さつきと同じように、頭の上からつま先まで、じろじろと検分されている。しかも、『これ』つてなんだ。カイドの客に怒つてもいいのか戸惑つていると、急に腕を引かれた。

「これとか言うな。そして、近づくな」

カイドに肩を抱かれて立つキヤルを、客はじろりと睨みつけた。

「そうだね。僕もそうしたかつたさ」

意味深に呟いて、彼は大きなため息を吐く。



「だけど、そうできない理由があるのだよ」

腕を組んで嘆かわしいと、首をゆつくりと横に振った。

彼が言うには、『自分は、見極めに来た』そ�なのだ。

「君は女に溺れて、正常な判断ができるいないようだから」

客がカイドに向かつて言い放つ。その言葉に、キヤルは非常に驚いた。

——女に溺れて!? いつ!? カイドにそんな相手が!?

目を丸くしてカイドを見るキヤルの頭を、カイドがはたく。

「お前の誤解が一瞬で伝わってきた。馬鹿か」

「ええ? だつて、溺れてるつて……」

軽くはたかれただけなのに、意外と痛かった頭を押さえて、キヤルは抗議する。

「相手はお前だ」

「ああ、なるほど。私……? はっ?」

まさか、カイドがキヤルに溺れて正常な判断ができなくなっていると?

「なわけないじやない!」

「まあ、そういうこともあるかもな」

キヤルがしつかり否定したというのに、カイドはけろつと肯定してしまう。

「カイド!?!」

目を剥むきキヤルを横目に、カイドは客に向き直った。

「で? それは仕事とどうかかわる?」

カイドが真剣に聞いているというのに、客は飄々とした態度で、別の疑問を口にする。

「カイドが落とされたいきさつが知りたいんだ。この堅物のカイドのどこをどうして骨抜きにしたのかを」

——骨抜きにはしていない。

キヤルが少し頬を熱くすると、彼は首を傾げる。

「その表情は可愛く見えないこともない。カイド、これか?」

「お前、帰れ」

ソファーに座つたカイドがお茶をすりながら、しかめつ面で告げた。カイドの他人への対応は冷たいと思うことが多いが、今ばかりは大賛成だ。

「ダメだよ。僕に分からぬことは一つもないし、あつてはならない。僕はこの世界の英知の結晶なんだ。君、名前は?」

この人の扱いをどうすればいいか分からなくて、キヤルは素直に答える。

「キヤル・アメンダです」

しかし、彼はキヤルの答えを鼻で笑い、顎をそらした。

「知っていたよ。もちろんね!」

——だつたらなぜ聞いたのだ。

キヤルが呆れた顔をすると、彼はソファーにふんぞり返つて、なぜか自己紹介を始めた。

「僕はオーレリアン・シャルパンティだ。オーレリアン様と呼んでくれて構わないよ。王室の筆頭魔法使いである僕の名前を呼べるなんて、光栄だと思うがいい」

ひたすら面倒くさい人だ。彼の名前などどうでもいいのに、呼んでもいいと押しつけてくるとは。キャラルがカイドに視線を送ると、無言で首を横に振られた。呼ぶなということだろう。

「ええと……ありがとうございます」

一応、礼を述べると、オーレリアンは何度か頷く。

そうして、頼んでもいないのに、カイドとの関係性を語り始めた。

本人曰く、カイドの一番の理解者であるらしい。カイドは黙つたまま不快げに眉を寄せたが、彼がSランクになった時からの付き合いなのだろう。

今日は、そのカイドが惚れ込んだと噂の薬師をわざわざまで見学に来たという。

なんと、彼は城に勤める筆頭魔法使いで、我が国のことはもちろん、他国についてもその術であらゆることを知っていると豪語する。

さらに、筆頭魔法使いというくらいなのに、彼は若く美しい容姿をしている。キャラルのイメージでは、白髪の老人だったのだが。

「僕は英知の結晶である頭脳と、この世のものとは思えない美しさを兼ね備えた、稀有な存在なんだ」

「はあ……」

カイドは無視して、キャラルが作ったクッキーを頬張っている。キャラルもそれに倣つていいものだろうか。お茶を出すだけ下がるつもりが、ここに立たされたまま、長々と話を聞かされている。

「そんな僕に、だ」

オーレリアンは嘆かわしいと言わんばかりに、大げさに腕を広げて首を横に振る。

「どうしても分からぬことがあるってね。僕は、分からぬことが嫌いだ」

突然、そのようなセリフが飛んできて、キャラルは目を瞬かせる。

もしかして、彼が用事があるのは自分なのか。さつきまで分からぬことは何もないと言つていたその口で、分からぬことがあるのだと言い、キャラルを睨みつけている。

「どうやってカイドを籠絡したんだ」

まだその話だったのか。長い自分語りを聞いた後なので、随分前の話題だったような気がする。

「籠絡はしていません」

キャラルが答えると、彼はさらに睨みつけた。

「秘密にしようというのか」

そもそもしてないっていうのに。

カイドはキャラルの返答に興味があるのか、口を動かしながらこちらを眺めている。

今晚、食事抜きにしてやる。キャラルは内心でそう思った。

「そもそも、薬師と聞いていたから、もっと頭の良さそうな熟女を想像していたんだけど」

多分、それは薬師というより薬屋のおばあちゃんなんだ。

おばあちゃんに籠絡されるつて、カイドはどんな印象を持たれているんだ。

「お邪魔してすみませんでした。失礼します」

もう無理矢理退室してしまおうと、キヤルは頭を下げる。なのに……

「ちょっと待つて。これ、薬湯？」

オーレリアンが、湯のみの中を睨みつけながら聞いてくる。信用ならない薬師から妙なものを飲まされると怪しんでいるのか。

「薬湯ではなく、緑茶といつて、ある植物の若芽を乾燥させて煮出したものです」

キヤルの淹れる緑茶は、色が濃い。薬湯のような色をしているが、香りのいいただのお茶だ。

「——何、もしかして僕が知らないとも思ってるの？」

……面倒くさい人だ。聞かれたから説明しただけなのに。

「緑茶くらい知っている。だが、君が緑茶に似せた妙なものを飲ませようとしているかも知れない」と疑つただけだ。僕はなんでも知っている。君がEランクであることもね」

——どうでもいい。

よし、無視して退室しよう。そう決めた途端、カイドの苦々しい声がした。

「お前、ギルドに手を回しだらう？」

オーレリアンは、カイドの鋭い眼光を正面から受け止めて、あでやかに笑う。

「ふふつ。なんのこと？」

「とぼけるな。ギルドの一職員が、正式な報告書に文句をつけてくるからおかしいと思つていたんだ。お前、キヤルの功績を認めないように、ギルドに圧力をかけたな」

カイドが鋭く睨みつけても、オーレリアンは涼しい顔で緑茶を口に含んだ。キヤルは驚きに目を見開いて突っ立っていた。

ギルドが、国からの圧力でキヤルをランクアップさせなかつた？

キヤルは、あまりギルドの組織などには詳しくない。ランクの上がり方も知らないし、そもそも成功報告を自分でしたことがない。

だけど、ギルドはどの権力にも属さない組織だということくらいは知つてている。

冒險者を束ねるギルドは、国にも教会にもおもねらない——はずだ。

ギルドが圧力に屈した証拠はない。文書などにもしていないのかもしれない。だけど、それが本当ならば、ギルドの自立が疑われることになる。

ギルドは常に公正公平。何者からも指示を受けない独立した機関でなければならない。

そうでなければ、ランクというものの根底が揺らいでしまう。

ランクが、金で買える時代が来てしまうかもしれない。

「カイド、君はさつき、それは仕事とどうかかわるのかと聞いてきたね」

オーレリアンの言葉に、カイドは目を細めるだけで返事をした。もう、大体の見当はついているというように。

オーレリアンも、一つ頷いて言う。

「Sランクである君に敬意を表して、僕が最終宣告をするためにやつてきたんだ」

オーレリアンが眞面目な顔でクッキーを口に放り込む。

——最終宣告？　それは、どういうことだ。

キヤルは彼の言葉が気になつて仕方がない。クッキーなんか食べてないで続きを言つて欲しいのに、彼は「美味しい」なんて呟いている。

「別に構わないけどな」

カイドは分かつてゐるというように頷く。

「そう言うだろうとは思つたよ。だけど、こつちはSランクを逃すのは惜しいんだ。ただ、Eランクの薬師なんかとは、とつと離れてくればいい。それを伝えに来た」

キヤルは全く動けなかつた。

離れるのは嫌だと叫ぶ自分がいる一方、仕方がないと諦めそうになつてゐる自分もいる。「嫌だね」

カイドはキヤルの悩みなんて全く気にせず、あっさりと拒否する。

キヤルは口を開きかけたけれど、何を言つていいのか分からない。

オーレリアンは、そんなキヤルに視線を流して言う。

「カイドに、疑惑が持たれている。惚れた女に頼み込まれて、彼女のランクを上げるために嘘の報告を上げていると」

それは昨日、ギルドでも言われたことだ。

「お前が流した噂だろう。そんなもの、どうでもいい」

カイドは少しも動搖していない。

だけど、キヤルはどんどん追い詰められていくような気がしてた。

——お前がいるせいで。足手まとい。邪魔者。

「カイドがこのままEランクの人間と組むつもりなら、君に依頼をする人間はいなくなるだろう。実質、解雇と同じだ」

最後の言葉はカイドに向けて放たれたというのに、カイドはふんと軽く鼻で笑つた。

冒険者は、誰かに雇われているわけではない。しかし、依頼を受けることができなくなつた冒険者は、もう引退するしかない。

「別に構わない。元々、拠点をコロンに移すつもりでいた。依頼があろうがなかろうが、そこで問題なく暮らせるよ」

今回もらった報酬だけでも、結構な額になる。キヤルが薬屋として商売し、カイドに手伝つてもらえれば、暮らすには困らないだろう。

しかし……それで、本当にいいのだろうか？

キヤルがそばにいることによつて、カイドは冒険者としての地位を失う。

何不自由ない生活どころか、誰もが平伏すほどの権力を持つてゐる彼を、キヤルのいる場所まで引きずり下ろすことになるのだ。

「もちろん、この家も返してもらう……って言つても意味ないよな。ほとんど使ってなかつた

し……。だが汚名を被つての引退になるぞ」

女に溺れた馬鹿な冒險者として引退することになる。

「どうせ真実じゃない。そんな汚名なんて、被つてもいいない」

カイドが小馬鹿にしたように笑う。オーレリアンも、カイドの反応は分かつた上で言つたのだろう。きっと今の言葉は、キヤルに向けた言葉だ。

「君に救われる人間は、これからも多数いるはずなんだ。それを、放り捨てるど?」

オーレリアンは、カイドではなく、キヤルに言つている。

『カイドの力を必要としている人々を、見捨てるのか?』

キヤルさえ離れれば、これからもカイドは大勢の人間を救うのだろう。

——お前さえ、いなければ。

耳の奥で、反響するように鳴り響く声。

それに押し潰されそうになつた時、キヤルの手が強く握られた。

はつとして視線を移すと、真剣な表情のカイドが、キヤルを見ていた。

「キヤルの力を認めない方が、大勢の人間を見捨てることになると思うが」

「なんだつて?」

不快げなオーレリアンの声が聞こえるが、キヤルは気にならなかつた。

カイドが自信満々で笑つている。

「彼女の薬師としての能力と知識は、ずば抜けている。俺は、彼女以上の薬師に会つたことが

ない」

彼は、手放しでキヤルを褒めちぎる。

照れくさいけれど、今は嬉しい。^{きし}軋んでいた心が、ほつと緩む。

「城の医術士局長にも会つたことがある君が? はつ! では、彼女がこの国最高の薬師だとでも言いたいのか?」

さすがにカイドの言葉は言いすぎだつたようだ。喜んでしまつた手前、ばつが悪い。だがキヤルが俯くのとは反対に、カイドは顔を上げる。

「ああ。そう言つてはいる。彼女以上の薬師はない」

彼は、ニヤリと笑つて堂々と肯定してしまつた。

キヤルは驚きに目を瞠り、オーレリアンは怒りに眉を寄せせる。

「残念だよ、カイド。そんな女に溺れてここまで正常な判断がつかなくなつてているとは思わなかつた。僕からの最後のチャンスを受け取つてもらえないようだね」

わざとらしく大きなため息を吐いて、オーレリアンは立ち上がる。

「失礼するよ」

彼の怒りの声を聞いても、カイドはひらりと手を振つただけ。

オーレリアンは肩をいからせたまま、窓へ近づいた。何をするつもりかと思つてはいるが、手も触れずに窓を開け、ひよいと外の何かに飛び乗つた……よう見えた。

驚いて彼を凝視するキヤルの表情を見て、少し気が済んだのだろう。最後には軽く笑顔を見せた。

彼は手を振つて、廊下でも歩くかのように空中を歩いていく。

いろいろなことに驚きすぎて、キヤルはもうオーレリアンの背中を見つめることしかできなかつた。

次の日、朝食の席で、キヤルはまだオーレリアンが言つていたことについて考えていた。

カイドにこのまま冒險者をやめさせていいのだろうか。……よくない、となつたら、キヤルはカイドから離れるしかなくなる。

何度も考へても同じ結論に至る思考に、キヤルはため息を吐く。

そこで、大きな手が優しく彼女の頭を撫でた。

「考えなくてもいい。俺は冒險者に未練はない」

カイドは優しく笑う。

その笑顔に、キヤルはほつとする。その気持ちの中の罪悪感を見て見ぬふりをして。「やらなければならぬ仕事は、今日にも終わらせる。そうしたらすぐにコロンへ発つぞ」

もやもやした気持ちが晴れなかつたキヤルは、その言葉に顔を上げる。

「え、すぐに!?

「そうだ。明日には王都を発つ。これ以上ここにいる必要はない」

カイドはひょいと鞄を肩に引っかけると、「行つてくる」と言つて城へ向かつた。王都に滞在して、もうすぐ三週間が経つ。

そうか、もうここで仕事が終わつてもおかしくないくらいの時間が経つたのだ。
——コロンに帰れる。

さつきまでの不安が嘘のように晴れてしまつた。
罪悪感がなくなつたわけではない。カイドの人生を大きく変えてしまうことになるのだ。だけど、帰れるということが、キヤルの心を軽くした。

キヤルはくるりと家を見回して、大事なことを思いつく。

「あ、珍しい薬草は買っておかないと」

王都には、國中どころか、各國から集められた珍しいものがたくさんある。この國では見られない植物も売られているのだ。それらを買ってからコロンに帰りたい。できれば、コロンのみんなにお土産にできるようなものもあるといい。

キヤルは時計を見上げると、さつと朝食を片付け、市場へと出かけることにした。

市場はいつも通り、多くの人であふれ返つてゐる。

だけど、キヤルが欲しがるものは特殊で、あまり人がいない店にあることが多い。

どうやつて食べるか分からぬ野菜や果物。妙な匂いを放つ葉。泥にしか見えないバケツの中身。キヤルから見れば、どれもお宝なのだが、普通の人にはそうではない。

キヤルは混雜した市場の、比較的すいた店を、あっちへこっちへと動き回る。